

要 旨

本研究では、総合的な学習の時間の中で行う英語活動において、コミュニケーションの意欲や態度を育てることを目指し、2つの手立てを取り入れて実践を行った。その2つとは、聞いたり伝えたりする必然性のある活動を組み込むことと、活動を通して異文化をもつ人を含めた自分の周りの人に対する気付きをもたせることである。その結果、児童は、コミュニケーションをとる「楽しさ」を感じたり、「自信」を得たり、人に対する「気付き」をもったりした。そして、もっといろいろな人とコミュニケーションをとってみようという意欲や態度が見られるようになってきた。

〈キーワード〉 ①コミュニケーション ②楽しさ ③自信 ④気付き

1 研究の目標

総合的な学習の時間における国際理解教育の一環としての小学校英語活動において、伝え合うことよさが感じられる活動の工夫を通して、コミュニケーションの意欲や態度を育てる指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

対人的コミュニケーションの不足による問題が増加している今日の社会において、自分の周りの様々な人とつながる力を育てることは、児童にとって、現在の生活のみならず、今後国際社会を生きていく上でも大きな意味をもつ。そして、これは総合的な学習の時間に全人的な教育を目指して行われる国際理解教育、また、その一環としての小学校英語活動のねらいにもつながるところである。

『小学校英語活動実践の手引』（文科省2001）によると、小学校で行われる英語活動は、英語という言語そのものの習得ではなく、コミュニケーション能力、すなわち、自分の周りの人と積極的にコミュニケーションをとろうとする意欲や態度を育てることを主なねらいとしている。そのねらいに近付くには、英語活動の中に、児童が自ら「聞きたい」「伝えたい」という気持ちをもち、相手に進んでかかわっていきこうとするような必然性を含んだ活動や、相手に対して関心や気付きをもち、視野を広げることができるような活動を仕組むことが重要になってくる。それによって、児童が感じるであろう人とかかわる「楽しさ」、コミュニケーションへの「自信」、あるいは、人に対する「気付き」が、もっといろいろな人とコミュニケーションをとってみようという意欲や態度につながり、これからの国際社会を生きていく基盤となるものと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

小学校英語活動の各時間の指導過程において、次のような活動の工夫をすれば、積極的にコミュニケーションをとろうとする意欲や態度が育つであろう。

- (1) 英語を聞いたり様々な方法で伝えたりする必然性のある活動の設定
- (2) 異文化をもつ人を含めた、自分の周りの人に対する気付きがもてるような活動の設定

4 研究の内容と方法

- (1) 対人的コミュニケーションや英語活動に関する理論研究
- (2) 児童の実態調査とコミュニケーション活動を効果的に取り入れた英語活動の単元開発
- (3) 検証授業の実施と児童の変容を基にした仮説の有効性の検証

5 研究の実際

(1) 研究の全体構想

人が周りの人と積極的にコミュニケーションをとろうとするとき、それは、心理的側面に支えられていることが多い。その人ともっと仲良くなりたい、その人のことをもっと知りたいという相手への思いが、コミュニケーションをとろうとする意欲や態度につながるのである。一方、コミュニケーションがうまくとれないとき、そこには、人とのかかわりに自信がない、人とかかわることのよさを感じた経験が少ない、人に対する関心が薄い、先入観が大きい、といった要因があると考えられる。したがって、「コミュニケーションをとろうとする意欲や態度」を育てるには、それを支える要素が児童の中ではぐくまれることが必要となる(表1)。そこで、英語活動を通して、その要素をはぐくむために、次の2つの手立てを取り入れた活動を設定することを考えた(図1)。

ア 英語を聞いたり様々な方法で伝えたりする必然性のある活動

受信型コミュニケーションを重視し、タスクベースの活動(英語の指示や説明通りに作業ができることを重視した活動)を組むことで、「相手の言うことを一生懸命聞こうとした」「自分にできる方法で伝えられた」という経験をさせ、コミュニケーションへの「自信」をもたせる。また、友達やALT、教師と一緒に考えたり、作ったり、遊んだりするなど触れ合いの多い活動を通して、コミュニケーションをとる「楽しさ」を味わわせる。これらの活動において、日本語なら簡単に理解し伝えられることが英語ではままならないという状況に置かれ、児童は「いかに相手の気持ちを受け取り、自分の気持ちを伝えるか」というコミュニケーションの原点と向き合うことになる。活動の中で、児童が作業そのものに興味をもち、楽しんで取り組むために英語を聞くという必然性を作ることやコミュニケーションの相手と多くつながりがもてる場を作ることが重要である。

イ 異文化をもつ人を含めた、自分の周りの人に対する気付きがもてるような活動

コミュニケーションに欠かせないのは「相手」という存在で、相手に興味をもつことはコミュニケーションの大きなきっかけになる。そこで、簡単な英語を使って、他者の思いや考えに触れる活動を設定する。相違点の方が先に見えてしまうことが多い外国の人や、同じクラスであっても、これまであまり付き合いのなかった友達に対して、「自分と同じだ」「自分とは違っているけど、それもいいな」「知らなかった、そうだったんだ」と、相手に対する「気付き」をもたせる。自分と相手との同質性、異質性を受け入れることや、先入観をなくしていくことで、「同じように生きている人間なんだな」という思いを実感させ、自分と相手との心的な距離の近付きを感じさせることが重要である。

表1 コミュニケーションへの意欲や態度を支える3つの要素

- | |
|--|
| ① 人と一緒に何かをすることに「 <u>楽しさ</u> 」を感じることができる。 |
| ② 進んで人とコミュニケーションをとることに「 <u>自信</u> 」がもてる。 |
| ③ 広い視野で自他に目を向け、様々な「 <u>気付き</u> 」がもてる。 |



図1 「伝え合う力」を育てる英語活動からのアプローチ

(2) 授業の実際

ア 授業実践Ⅰ「Original flag を作ろう」(第4学年 男子17名 女子20名 計37名 全3時間)

「自分の思いやアイデアを生かしたオリジナルの旗を作る」という題材を中心にして、友達とゲームを楽しむ、教師やALTの英語を聞いて作業をする(受信型)、自分にできる方法で意思を伝える(発信型)などのコミュニケーション活動を積み重ねていった。その過程で、児童は「分かりたいから耳を傾けて聞く」、「言語、非言語など様々な手段で意思を伝えようとする」「言葉以外の情報なども手掛かりにし、意味を推測する」といったコミュニケーションの原点を体験することができた。

また、旗の色に関連して、感情のような抽象的な概念を自分のイメージする色で表現する「心は何色?」という活動を行った。自分の思いを表現したり、友達やALTなど周りの人の思いを感じ取ったりする活動を通して、自分だけの視点で物事を見るのではなく、人の考え方、感じ方にも目を向けるようになってきたことが、児童の振り返りから感じられた。

イ 授業実践Ⅱ「Hello! Laura.」(第4学年 男子17名 女子20名 計37名 全2時間)

カナダ出身のALTを迎え、カナダの遊びを行ったり、ALTが児童と同じ年齢のころに考えていたことや描いていた夢などの話を聞いたりした。また、カナダを代表するものの一つであるメープルシロップを取り上げ、そこから発展させ、英語の指示によるパンケーキ作りを行った。児童は、それぞれの活動において、友達やALTとのコミュニケーションを楽しんだり、カナダと日本、そして、自分たちとALTとの同質性や異質性に気付いたりしていた。また、活動を積む中でALTに対して親しみが増し、心的な距離の近付きを感じた児童も多かった。

ウ 評価について

英語活動のねらいに基づき、評価の観点と観点の趣旨を表2のように設定した。

表2 評価の観点と観点の趣旨

評価の観点	コミュニケーションへの積極性	コミュニケーションの技能	異文化、自文化への気付き
観点の趣旨	コミュニケーションの楽しさを感じ、自分の周りの様々な人と積極的にかかわろうとする。	英語に慣れ親しみ、相手が言っていることを聞いて大まかな内容が分かるとともに、言葉やジェスチャーなど自分にできる方法で、意思を伝えることができる。	異文化をもつ人を含めた、自分の周りの様々な人との交流を通して、自分と相手との同質性や異質性、また、それぞれのもつよさに気付く。

(3) 児童の変容と考察

2つの手立てを取り入れた活動を組むことによって、先に挙げた3つの要素が児童の中にはぐくまれ、コミュニケーションをとろうとする意欲や態度が表れてくれば、その手立ての有効性を示すものであると考え、それらについて児童の変容を見取り、考察を行った。

ア コミュニケーションをとる「楽しさ」について

英語という異言語をツールにするよさの一つは、みんながほぼ同じ言語レベルで活動に参加でき、母語とは違ったコミュニケーションの楽しさを味わえることである。間違ってもあまり気にならず、母語では幼稚だと思うことでも互いに抵抗なく表現し合えたことで、児童はより意欲的にコミュニケーション活動を行うことができた。ゲームなど多くの活動の中で、どきどきわくわくしながらも、言語・非言語のコミュニケーション手段を使って相手とつながることのうれしさを感じたり、みんなで一つのものを作り上げる、一緒に体を動かすなどの共通体験から楽しさを感じたりしたことが、振り返りの感想からうかがえる。活動を通して生じてきた、相手と通じ合

えてうれしかった、仲良くなれて楽しかったという気持ち、もっと一緒に活動したいという意欲や、相手と積極的にコミュニケーションをとろうとする態度につながっていったと考える(図2)。

イ コミュニケーションへの「自信」について

例えば、パンケーキをうまく作りたいから一生懸命聞く、旗を完成させるためのパーツが欲しいから何とかして伝える、というように活動の中にコミュニケーションの必然性をもった状況(本当に聞きたいこと、言いたいことが発生する場面)があるとき、児童はその状況を何とかして乗り越えようとする。実際の活動におけるそのような場面で、児童は、英語での指示の一つ一つを集中して聞き、その中から、聞いたことのある言葉やジェスチャーなどを頼りに内容を推測して反応するなど、相手とつながる方法を体得していた。「わかった!できた!これでいいんだ!」という成功体験を積み重ねたり、担任やALTから賞賛の言葉をもたらしたりするごとに、相手とのコミュニケーションに自信をもち(表3)、その自信が行動にも表れていた。

ウ 人に対する「気付き」について

人それぞれの「心の色」を知ったり、オリジナルフラッグに込めた思いを聞いたりすることで、児童は友達の内面に触れ、意外性を感じる、親近感をもつなど新しい気付きをもっていた。身近な人のことを改めて知ること、「そうか、おもしろいね、いろいろあるね」などの新鮮な感想が見られた。ALTとのかわりについては、まずは一緒に楽しく活動すること、そして、その人の人柄や考えに触れることで、自分との心的距離の近付きを感じたり、言葉や文化、外見が違っても、様々な方法で心が通い合うのだと気付いたりしていた。また、同質性や異質性について自分と比べながら、考えを広げている児童もいた。児童に、より身近で自分と照らし合わせて考えることができる活動が、違いも含めて周りの人を知る、認めるということのきっかけになったと言える(表4)。

(4) 抽出児のコミュニケーションに対する意欲や態度の変容と考察

コミュニケーションを苦手とするA児は、事前のアンケートで「どうしていいか分からない、自分だけがいい、楽しくない」と友達と一緒に活動することに抵抗を多く感じていた。一方、ALTなど外国の人に対しては、「言葉が分からないから、どうせ自分とは違う人だから」という理由で、ほとんどかわりをもととせず、ALTの話に興味を示すこともなかった。友達とのかわりについては、意図的なグループ構成をしたり、A児の嗜好を考えて活動内容を決めたり、友達とのコミュニケーションのきっかけを与えたりする中で、徐々に楽しそうに活動する様子を見せ始めた。また、担任やALTのモデルを参考にして、少しずつではあるが自分から友達への働きかけを行う

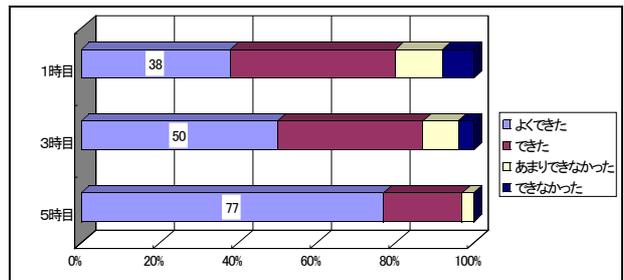


図2 先生やALTの話をよく聞いたり、進んで反応しようとしたりできたか

表3 児童の感想から見取れる自信の高まり

・ ローラ先生に自分から呼び掛けて話すことができうれしかった。今まで何人かの先生と遊んだけど、自分から話したのははじめてでした。
 ・ 先生たちのジェスチャーとかもよく見て、聞くぞ!という気持ちで聞いていたらよく分かったから、なんか自分で、やったね!と思った。
 ・ 1回目に材料をもらうとき、「グッド!」と言われてうれしかったから3回ももらいに行きました。

※ ~~~ : 心情への表れ - - - - : 態度への表れ

表4 児童の感想から見取れる視野の広がり

・ やっぱりみんな考えることは違うと思った。いろいろあっておもしろかったです。
 ・ 仲良しの友達と同じ色が一つもなかったのでびっくりした。まだ知らないことがいっぱいあるかもしれない。
 ・ カナダと日本は国は違うけど、人が考えることはあんまり変わらなかった。きっと他の国の人もおんなじような感じかなあ。
 ・ ローラ先生のこといろいろ分かって、うれしかった。もっとたくさんさんのことを聞きたいな。

※ ~~~ : 心情への表れ

場面も出てきた。ALTとのかかわりについては、心理的な隔たりを小さくしていく手立てとして、表情やアイコンタクト、ジェスチャーなどの非言語的手段で、ALTに意識的にアプローチしてもらったり、同じグループで活動してもらったりした。

4時目の活動の際には、「外見や言葉は違うけれど同じ部分はたくさんあるんだ」ということに気付かせるために、A児の興味のある事柄を話題として取り上げた。A児は、ALTが子どものころに好きだった教科やスポーツが自分と同じだったという事実から、相手に対して新鮮な思いを抱き、親しみをもち始めるきっかけを得たようである。それ以降、ALTの話すことに興味をもって聞こうとする様子も増えてきた。チェックリスト（評価の趣旨に基づいて、チェックする観点を挙げたもの）を基に次の支援の視点をもったり、できたことに対しては小さなことでも即時に賞賛したりという手立ても有効であったと考える（表5、6）。それに伴い、A児はALTとの心的距離の近付きを自覚し始め、活動後の振り返りカードに下図のように書き表していた（図3）。

表5 A児の感想に見る「楽しさ」「自信」の表れ

(1時目) 心の色のときに先生から名前を呼ばれて、ぼくの パワフルカラー のことを話した。当てられて 少うれしかった 。
↓
(2時目) 色ぬりが楽しかった。すいすいできた。友達にも 教えてやりました 。アマリア先生から「グッド！」と 言われたのがうれしかった です。かるたのときも色の名前をよ く聞いて2枚とりました 。みんなで 楽しくできました 。
↓
(3時目) フラッグを作っているとき、先生から色のことを聞かれました。 ラッキーカラーと答えたら 、それでよかったみたいだったので、 よかったです 。ジェスチャーを見ながらだったので 絵本の話もよく分かって楽しくなりました 。
↓
(4時目) 友達と 大きい声でダウン、ダウンとか 言っているとき、 なんかとてもうきうきしました 。メープルシロップの話が おもしろくて、英語だったけどいつもよりよく分かりました 。次の時間が 楽しみ です。
↓
(5時目) パンケーキの材料を、ぼくは 3回ももらえました 。「 サンキュー 」まで 言えました 。前はあんまり言えなかったし、 楽しくないときもあったけど、今はめっちゃ楽しい! もっと友達や外国の人とこんなことをやってみたい 。

表6 A児の感想に見る「気付き」の表れ

(1時目) (友達やALTの心の色を見て) 仲のいい友達も気持ちが違うところがある ことが分かった。
↓
(2時目) (いろんな人と心の距離を近付けるには) いっぱい話をしたり、声をかけて遊んだりしてみるの がいい 。 言葉が分からなくても何とか感じる がしてくる。友達とも 仲良くなれる 。
↓
(3時目) (自分の周りの様々な人のことを知っていくのは) まあいい と思う。けっこう いろいろ分かってくるとおもしろい から。
↓
(4時目) (自分と同じ年のころのALTの話聞いて) いろいろ話を聞いたり、遊んだりして、発見がいっぱい あった。 ぼくと同じ!と思うところもあったし 、ローラ先生とも つと仲良くなれるような感じ がしてくる。
↓
(5時目) (周りの人と接するとき、自分で「前と変わった!」と思うのは) 相手がだれでも話したり遊んだりしていると仲良くなれる 。と 少しだけだけ 思うようになった。それは、いろいろ遊んだり、話したりして 楽しかったから かなあ。 ※表5、6 ~ : 心情への表れ、 - - : 態度への表れ

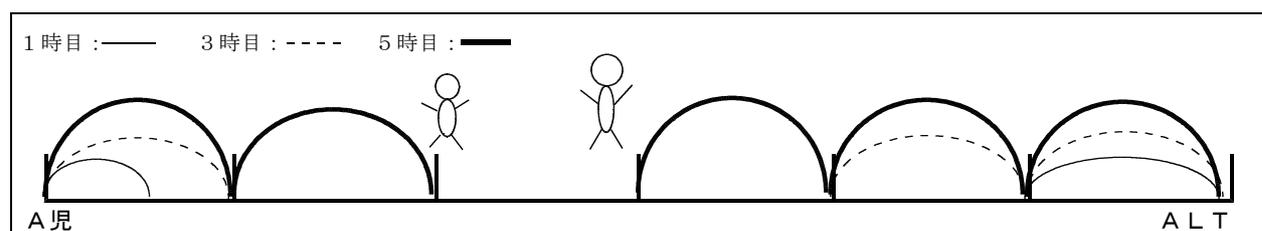


図3 ALTとの心的距離の近付きを表した図（A児の振り返りカードの記述より抜粋）

(5) コミュニケーションに対する意欲や態度がもたらす児童の変容

英語活動での前述のような経験を通して、児童には、その他の生活の場面でもコミュニケーションに対しての自信や自分への期待感（もっとこんなことができそうだ、やってみよう）などが生まれつつある（次頁図4）。また、視野を広げて人を見ることで、相手との接し方を考えるなど、人とのつながりという面でも自分の考えをもち始めていることが感じられる（次頁表7）。これは、経験に基づく自信や受容の気持ちである。コミュニケーションの力はコミュニケーションの中でこそ育つ。英語活動で感じる「人とかかわるっていいな、相手のことを知るっていいな」という気持ちの積み重ねが、ひいては母語でのコミュニケーションの力をも高め、人とのつながりが広がるなど、日常のコミュニケーションの場面にも生きてくることが期待される。これは、「国際社会にお

いて様々な人とおくせず積極的にコミュニケーションを図る力を育てていく」という総合的な学習の時間の国際理解教育のねらいにもつながるところである。多くの人と触れ合うよさを感じる中で、自分と異なるものへの偏見や先入観が減っていき、受容する気持ちが生まれてくるのが、児童自身の世界に広がりをもたらすと思われる。

表7 5時間終了後のアンケートより

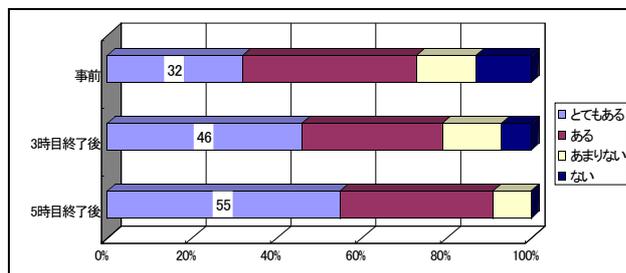


図4 初めて会う人にも、自分からあいさつをしたり話しかけたりできる自信がありますか

○ 「どうしたらいろいろな人と仲良くなれるの？」という質問に、あなたは何とアドバイスをしますか。

- ・ いろんなお話をしたり、自分のことを教えてやったり、その人のことをいっぱい聞いたりしたらいい。
- ・ いろいろ違う人とも、変なふうには思わないで遊んだりする。
- ・ 相手が外国の人だったりしても、やさしい心をもってたら、ぜったい仲良くなれるよ。その人の好きなこととか、だんだん分かんると、もっと仲良くなれるよ。
- ・ まず近付いてみること！その人に興味津々になろう。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究を通して、英語活動においてコミュニケーションの意欲や態度を育てるには、次のようなことに考慮して、その活動内容を設定していく必要があることが明らかになった。

ア 児童が興味をもつようなタスク活動を設定し、「聞きたい、伝えたい」と思えるような状況や場面ができるだけ多く発生するような単元を構成する。その活動の中で、無理な発話を求めない形でのやりとりが重ねられるゲームなどを取り入れ、児童一人一人がめあてをもち、達成感や楽しさを味わうことができるようにする。

イ 活動で使用した言語材料を用い、児童に身近な話題で、自分と相手との共通点や相違点に気付いたり、相手を知っていくことができたりするような活動も適宜仕組んでいく。ALTなど外国の人との交流ができる場合には、その人自身について、また、その人を通して知ることができる生活や文化について、児童の現在の生活にかかわりの深い内容を取り上げる。

ウ 「どんな英語を教えようか」と考えるよりも、「遊び感覚にあふれ、児童が楽しそう、やってみたいと思うことは何か」と考え、そこにツールとしての英語を入れるという発想をもつ。つまり、児童の興味・関心を軸にして、「英語を」ではなく「英語で」という発想で活動を考える。

エ 友達と共に考えたり、作ったり、競い合ったりできるような触れ合いの多い活動を考える。また、例えば、ゲームで使用するものを活動の一つとして児童自身が作るなど、中心となるタスク活動のためのタスクを取り入れるような工夫をする。

オ 児童が何に関心をもち、どのような指導をすれば効果的か、別の教科では何を学んでいるか、児童の内面の状態はどうかなどを総合的に知っている担任が中心となり活動内容を考える。

(2) 今後の課題

ア 関心・意欲といった数値では表しにくい観点の適切な評価方法

イ 他教科との関連をもたせた英語活動の内容の充実

《参考文献》

- ・ 文部科学省 『小学校英語活動実践の手引』 2001年 開隆堂出版
- ・ 小泉 清裕 『みんなあつまれ！小学生のえいごタイム』 2002年 アルク
- ・ 宗 誠 「人とのかかわりを重視した英語活動を」『NHKテレビ・ラジオ学校放送 小学校3年 3学期』 2006年 日本放送出版協会